

国立がん研究センター

一日も早く薬を届けて 「がんに負けない国へ。」



国立がん研究センター東病院
副院長・呼吸器内科長
SCRUM-Japan事業代表者
LC-SCRUM-Asia研究代表者
後藤 功一 先生

1962年の開設以来、日本のがん対策を牽引し、がん研究・医療をリードする国立がん研究センター。産学連携による全国規模のがんゲノムスクリーニングプロジェクト「SCRUM-Japan」について、事業代表者である同センター東病院の後藤功一先生に話を聞いた。

遺伝子変異に基づいて適切な薬や治療法を選択するがん個別化医療。その推進に貢献するのが、国立がん研究センターが主導する日本初の産学連携がんゲノムスクリーニングプロジェクト「SCRUM-Japan（スクラム・ジャパン）」だ。

プロジェクトの事業代表者を務める同センター東病院の後藤功一先生は「がん患者さんに一日でも早く、有効な薬を届けることがこのプロジェクトの使命です」と語る。

スクラム・ジャパンは肺がんを対象とした「LC-SCRUM-Asia」と、その他の固形がんや血液がんを対象とした「MONSTAR-SCREEN」の2つを柱に、全国270以上の医療機関と製薬企業20社が連携し、がん患者に高度な遺伝子検査を無償提供。そ

の結果をがん治療薬の治験や開発へとつないできた。今日までに、28種類の新しい治療薬や14種類の診断薬を世の中に送り出してきた。

全国の医師の情熱と 企業の志が結びついた

プロジェクトが立ち上がったのは2013年。希少な遺伝子変化を伴う肺がんの薬が見つかったが、患者数が少ないため治験へ進めずじま。そこで後藤先生は、がん治療に携わる全国の医師に協力を呼びかけ、肺がん患者の遺伝子スクリーニング基盤「LC-SCRUM」を構築。その結果、希少な遺伝子変化を持つ患者を見つけ出し、短期間で新薬の治験へこぎ着けた。

「がん患者さんに有効な薬を届けたという全国の医師の情熱と、製薬企業の志が結びついたおかげで、個別化医療を前に進めることができました」

同プロジェクトで培った実績

とデータ精度は世界に認められており、国際共同治験を行ううえで重要な拠点となっている。「海外の新薬が日本に入るのが遅れるドラッグ・ラグの防波堤の役割も果たしています」と後藤先生。

日本のがんゲノム医療を支えるプロジェクトを継続していくには、安定した財源が不可欠となる。「全国のがん患者さんへ新薬を届けるために、寄付による支援の役割は非常に大きいものがあります」と後藤先生。

寄付が、日本のがん医療を前に進める。

お問い合わせ



国立がん研究センター基金
The National Cancer Center Foundation

国立研究開発法人国立がん研究センター 寄付係

☎（築地キャンパス）：03-3547-5333

☎（柏キャンパス）：04-7133-1111（内線91460）

受付：9時～16時（土日祝・年末年始除く）

メール：ncckifu@ncc.go.jp

SCRUM-Japanの詳細はこちら

<https://scrum-japan.ncc.go.jp/>

